

高木兼寛の高弟 永山武美

永山武美は慈恵医大の第三代学長（昭和 22-27 年）である。彼は、高木兼寛のつくった医学校（当時は東京慈恵医院医学専門学校）に高木の勧めで入学し、その後高木の亡くなるほぼ 20 年のあいだずっと高木の薫陶を受けた生粋の慈恵人であり、またそれ故に“高木兼寛お声掛かりの唯一の弟子”とも云われた人である。永山はこの高木の期待に十分応えて著名な生化学者に成長するとともに多くの業績を残した。そして晩年には、第二次大戦後の最も困難な時期の学長に就任して、戦争で疲弊したこの大学の復興に粉骨砕身したのであった。

1. 師弟の出会いまでの前史

慈恵医大百年史には永山武美についてこのような記述がある。「永山武美学長の伯父は、西南の役で西郷隆盛に従い、薩摩軍第三大隊長として、その拠点川尻方面の激戦で戦死を遂げた永山弥一郎であり、また父は屯田兵司令官、第七師団長永山武四郎中将である」と。永山武美の人物をはかる資料にもなるので、二人の経歴をここに簡単に記すことにする。

戊辰戦争では永山弥一郎、武四郎および高木兼寛の三人は会津戦線の郡山、白河あたりで官軍（薩摩軍）として一緒に戦ったが、次第に別々の道を歩むことになった。維新後、弥一郎と武四郎は蝦夷地（北海道）で屯田兵の世話をしていたが、明治政府がロシアを怖れて樺太を放棄し千島と交換したことに反対して、弥一郎は明治 8 年、故郷鹿児島に帰った（武四郎はそのまま北

海道に残って屯田兵の仕事が続けた。また高木兼寛はあとで詳述するように同8年に西欧医学を学ぶため英国に留学した)。

西郷隆盛が政府に不満をもち薩摩士族とともに反乱に踏み切ったとき(西南戦争、明治10(1877)年2月15日)、弥一郎は西郷に従ってこれに加わった。一方、武四郎の方は政府軍に従って行動したので、兄弟が相い戦う結果になった。しかしこれには、この戦さにどちらが勝っても永山家は存続するという現実的な深慮があったともいわれる。事実としては周知のように武四郎の加わった政府軍が勝利したわけで、武四郎は生き残り、弥一郎は戦死を遂げた(同年4月12日)。

弥一郎の壮烈な最期の様子が司馬遼太郎の「翔ぶが如く」に出ているので、その一部をここに紹介する。

「そのあたりは味方といえば死骸以外になかった。

戦場に残っている薩人は、永山弥一郎とその数人の幕僚しかいなかった。永山は覚悟したとおり、この戦場で自害しようとおもった。
……

そこに小さな百姓家があった。その家に老婆がひとり住んでいたが、永山は身寄りはどこにいるのか、などとたずね、やがて『この家を譲って賜はんか』と懇請した。

永山は戊辰戦争以来、勇猛で知られたが、ひどく軽妙な味のある男で、口髭まで愛嬌になっているような男だった。……永山はこの戦さ(西南戦争一筆者)では西郷幕下の六人の将のひとりになっていたが、この戦さが勝てるとは思っていなかった。

その百姓家の老婆は、永山がこの方面の大將であることを知っていたし、永山の人柄が好きであったので、ぜひこのあばら家を差し上げる、といったが、永山は頼みこんで百円を老婆に渡し、買いとった(百円といえば当時立派な家が新築できる金額であった一筆者)。

永山は老婆を立ち退かせ、家に火を掛け、中に入り、白煙の中で切腹した。そのあと火が百姓家を包み、やがて燃えつきたとき、永山も灰になっていた。年、四十であった」。

西南戦争は西郷隆盛の自刃によって終結した(明治10年9月24日)。政府



父・永山武四郎

軍にしたがった永山武四郎は生き残り、再び北海道屯田兵司令官に復帰することになった。

維新後はじめられた北海道開拓の主力はなんとといってもこの屯田兵であった。屯田兵制度は1874(明治7)年に奥羽諸藩の士族から募集され、ロシアに対する国境警備隊の役割と開拓農民の役割を兼ね備えたものであった。その上、戊辰戦争の敗者になった士族(主に東北の士族)にたいして職を授けるという意味

もあり、政府にとってはまさに一挙三得四得の妙計であった。

永山武四郎(1837-1904)はこの屯田兵ならびにその制度の最初からの中心人物であり、さきの西南戦争の折には東北の士族(屯田兵)をひきつれて参戦したのであった。その頃の屯田兵指揮官は薩摩藩士が多く、薩摩王国とまでいわれていた。

屯田兵の第一陣は、明治8年に208戸が琴似村に入り(琴似兵村といわれ現在の札幌市西区琴似に当たる)、次いで翌年第二陣はその南東に山鼻兵村を開いた(現在の札幌市中央区道庁の南一帯)。今でこそそこいら一帯は札幌市の賑やかな中心部を占めているが、当時は人家が2,30戸散在するだけで、あとは全くの森林と荒野に覆われ、熊や鹿が横行していたといわれる。屯田兵たちは一戸だでの住宅をあてがわれ、食糧を保証され、軍隊式の生活と共同開墾にとりかかり、少しずつ荒野を開いていったのである。

樺太千島交換(明治8年)後しばらくロシアからの危機はうすらいだが、ロシアがクリミア戦争の敗北で再びアジアの侵出にのりだし、シベリア鉄道を計画しはじめた明治20年ころから再び危機がおとずれ、屯田兵の募集が増えはじめた。その頃になると屯田兵の配置は、札幌周辺にとどまらず、空知、雨竜、上川、根室、釧路、北見と全道の要地にひろがっていった。しかも永山武四郎が、それまで屯田兵の入植資格が士族に限定されていたのを、彼の決断によって、平民(農民)にも入植資格を与えたため、急速に兵数、地域が

増大していった。これは永山が、先の西南戦争のさい、農民から（徴兵制によって）徴集された兵隊が、薩摩（士族）軍にたいして実に勇敢に戦い、勝利したことを実見したからであった。彼は農民の力を高く評価していた。

永山はこのような平民兵村をまず上川地区の中央（現在の旭川市）に開いた（明治24年）。そしてそれ以後は次第に平民屯田兵を「開拓の尖兵」としてもっとも開拓困難な奥地にまで投入していった。彼がこの上川の地をまず平民兵村として選んだのは「北海道の開拓は内陸部からしなければならぬ。この上川の地は道の四方に通じうる天与の地であり、全道を手におさめることができる」という彼独自の考えからであった。このような永山の積極的行動力と洞察力によって、北海道の開発は驚くほど見事に成功していった。

永山の開いたこの上川の平民兵村はとくに永山武四郎の名をとって永山兵村と名づけられた（永山兵村の入植は明治24年にはじめられ、その数は400戸であった）。そこは密林もあったが殆どが平らな草原で、土地は肥えており、開拓事業は他の兵村にくらべて容易であった。その開墾率は全道一といわれ、他に先んじて用水路をつくり、水田を計画するなどして、兵村は急激に発展し、人口も3万人に急増した。

その後、永山兵村は旭川市の中心として発展していったため、永山武四郎の名はいまでも旭川市のいたるところに残っている。同市の永山町や永山一条から永山十四条までの条名など、また永山中学、永山神社など、みな永山武四郎からきているのである。

こうして明治32年に屯田兵の募集を止めるまで（25年間に）、北海道全体で37ヶ兵村、7,337戸、実に4万人にちかい屯田兵とその家族が入植していった（その中の5分の3、すなわち24ヶ村は平民兵村であった）。北海道の人口はこうして明治5年の11万人から、19年の30万人、29年の71万人と飛躍的に増えていった。

永山武四郎はこのような功績により、明治18年、勲三等旭日中綬章を賜り、屯田兵本部長に補せられ、さらに明治21年には岩村通俊にかわって北海道庁長官（現在の北海道知事に当たる）に任命された（屯田兵本部長兼）。また同29年には、屯田兵司令部が第七師団司令部に変わるのに応じて、中将に昇進

し、第七師団長に就任した。またその前年にはすでに男爵を賜わっていた。

永山武四郎には三男四女があり、本小論の主人公・永山武美はその第三男である。明治18(1885)年10月2日の生まれであった。

さて高木兼寛(1840-1920)についてもここに簡単にふれておきたい。(さきにも記したように)彼は戊辰戦争では薩摩藩医として会津攻めに参加している。そしてそこで自分の医療技術のあまりに未熟であることを知らされた。維新後は、東京の海軍病院の医師として当時猖獗していた脚気病に遭遇したが、そこでも自分(を含め当時の医者)のこの病気にたいする無知を嫌というほど知らされた。彼は、なんとかしてこの(国民病といわれた)脚気病の原因を探り、その予防法なり治療法を確立せねばならないと考えたが、しかし如何にせん自分にはそれを解決する基礎学力がなさすぎる、それを可能にするにはどこか西欧に出て医学の基本から学び直す以外に方法がない(この病気の研究はそれからでも遅くない)という結論に達した。彼はこのような念願をもって、1875(明治8)年6月、(海軍病院での師アンダーソンの勧めもあった)英国セント・トーマス病院医学校に留学した。

5年の留学を終えて帰国した彼は(明治13(1880)年11月)、早速脚気病の研究にとりかかった。当時、この病気は恐らく伝染病だろうと考えられていた(多くの病気がその原因菌によって伝染することが次々と発見されていたからである)。しかし高木はそのような考えにはあまり惑わされず、英国で興味をもって学んだ疫学的手法をもちいてその原因を第一歩から追究することにした。そしてついにこの病気は、伝染病ではなく、栄養の欠陥によっておこることを発見したのであった。これは画期的学説であり、国際的にもきわめて高い評価をうけることになった(後述)。

高木が帰国後行なったもう一つの仕事は医学校(成医会講習所)と病院(有志共立東京病院)を創設することであった(今日の慈恵医大と附属病院の前身である)。この成医会講習所はその後、成医学校(明治23年)、東京慈恵医院医学校(同24年)と名称を変えて発展していった。しかしこれらはいずれもまだ乙種医学校と称されるもので、卒業しただけでは医師になれず、医術開業試験(国家試験)に合格せねばならなかった。明治36年になって医学校

が東京慈恵医院医学専門学校(以後、慈恵医専と略)に昇格したときから、ようやく卒業すると同時に(試験を受けずに)医師の資格を得ることになった。この頃から高木の仕事は(彼の脚気の栄養学説はすでに不動のものになっていたので)、もっぱら医学生に教育に専念することになった(永山武美は専門学校になってからの2回生であった。後述)。

話の筋から少しはずれるが、高木は明治24年頃、永山武四郎・北海道庁長官から、北海道のまだ未開の土地を払い下げるからそれを買わないかという話もちこまれた。以前からの知己でもあり、高木は言われる通りその土地を買い、人をやとって開拓することにした。夕張郡角田村の267町歩と同郡長沼村の154町歩という広大な土地であった。高木はその土地の一部を村に寄付し、そこに神殿を建設して皇太神宮を祭った(明治36年)。

2. 志望を海軍兵学校から医学校へ

明治37(1904)年は永山武美にとって悩みの多い年であった。一つは自分の将来の問題、進学の問題であり、も一つは父・武四郎の病気のことであった。武美は明治35年に北海道庁立札幌中学を卒業していたが、それまで軍人の息子らしく軍人になることだけ(とくにカッコ良い海軍士官になること)を夢見て、海軍兵学校ばかり受験していた。しかし何度受けても失敗するのであった。頭脳は明晰であり、身体的にも申し分なかったが(スポーツマン、とくに柔道、鉄棒の選手であった)、ただ強度の近視のための不合格であった。もうそろそろ考えねばならない時期であった。

一方、武四郎は二年ほど前から胃の調子が悪く、公務が執れない状況にあった。胃がんであった。彼はそのため東京の芝茅場町で療養生活を



欧米視察の頃(1906)の高木兼寛

しており、高木兼寛がそこに隔日に往診にきていた。武美は、父の病苦をみるにつけ、また高木の立派な態度をみるにつけ、自分は医者になるべきではないかと思いはじめた。兄弟姉妹も賛成であり、しきりにそれをすすめた。

高木兼寛のすすめで慈恵医専に



慈恵医専入学時の永山武美

武美はさっそく往診にきていた高木に、医者になりたいのですが、どこかよい医学校はないでしょうかと尋ねた。ところが面白いことに高木は即座に「日本一の医学校がある。しかもそれはここから近いぞ」と答えて、彼の慈恵医専を教えたのである（たしかに往診先は芝茅場町であり愛宕山ひとつ越えれば慈恵医専であった）。一方、武美も素直なもので「とにかく高木先生がまじめに日本一といわれるのだから間違いあるまいというので試験を受けたところ幸いに及第した……」（随筆集より）ということであった。ただ入学試験では教育勅語について高木校長から口頭試問されると聞いていたので、勅語だけは全部暗記していった。

残念ながら父・武四郎は、武美の入学を見ることなく、その二カ月前に亡くなった（明治37年5月）。彼は亡くなる寸前まで、北海道に帰り、もう一度屯田兵の仕事をしたいと繰り返した。「自分は、屯田兵たちに、お前たちは北海道の土になれ、自分も北海道の土になる、と常に励ましてきたのに、いまさら東京で死ぬわけにはいかない、早く札幌の家に帰してくれ」と言い続けた。自分の生死についてはまことに淡泊な、軍人らしい最期であった。

永山武美の随筆に「妹」というのがある。彼の優しい性格を示す文章であるのでここに紹介する。

「やせ型の僕は、肥満型で短気な一歳下の妹とは何かにつけて対照

的で華やかに喧嘩をしたものである。札幌の体育会で柔道を習っていた僕にとって、妹はまさに最適の実験台であった。まだ小さいながら重量のある妹を畳の上に投げるとズシン、ドスンと派手な音をたてるのですこぶる痛快であった……。

明治 35, 6 年頃、僕は海兵受験のため上京することになったが、その日の近ずいたころ、朗らかなはずの妹がとかく沈みがちになり、口数も少なく、楽しい夕げのひとつさえ途中でどこかに消えるのである。怪しく思った僕は、ある夕べひそかに妹の跡をつけると、裏のリング畑へトボトボ歩いていったが、やがて木陰にたち寄り袖口に顔にあててすすり泣いているではないか。癩癩もちの、ユーモラスな妹にもこんな優しい反面があったのかと思って、僕も残念ながら泣かされてしまった。

そして上京後、故郷忘じ難きなかにもとくに懐かしく思われたのは、喧嘩の好敵手であり、一番憎い筈の妹であったのはまったく意外であった」。

余談になるが、この妹とはのちの俳人、阿部みどり女のことである。

1903 (明治 36) 年に医学校が医学専門学校に昇格したことはすでに述べたが、高木 (校長) はその期に彼独自の強固な主義方針にしたがって医学生への教育に専念したいと考えた。道德教育講座「明德会」を開いたのもその年であった。永山武美はその翌年に入学したことになるので、この高木の教育方針の影響をまともに受けることになった。

明德会では個々の徳目を教えるというよりは、道德の根本になる宗教、哲学の問題を考えさせることが主眼であった。そして最終的目的地は各自自分の原理、信念、見識といったものを自得することであった。高木もときどき講義を受け持ったが、彼は大和魂について話すことが多かった。よく出てくる講話に、大和魂の根本は マメニ (誠実)、ヤサシク (柔和)、アッサリ (淡泊)、スナオ (素直) にあるということがあった。永山ら学生はほとんど覚えてしまうほどであった。

永山は、四年間の教育を終え、ようやく明治 41 (1908) 年 7 月に卒業する

ことになった。卒業式では、高木校長は卒業生代表になった永山に卒業証書を授与した。そして校長の訓示にたいして永山は卒業生を代表して答辞を朗読した（慈恵医大百年史に答辞の全文が掲載されている）。

高木兼寛の命令で基礎医学を専攻

永山は卒業したら内科医になるつもりであった。そして東大の入沢内科に入る準備をしていた。ところが卒業試験が終わって試験場からでてくると、そこに高木校長が待っていた。「君は何をやるつもりだ」「はい、実は内科の方に志願しました、助手の志願を致しました」。高木はいきなり「それはいかん。わしは君をドブ板またぐ様な医者に育てた覚えはない。君は基礎医学に残れ」というのであった。

考える余地もなく永山はワンマン校長の命令によって基礎医学に残ることになってしまった。後に永山は「号令一下私は内科を弊履の如くに捨ててグールド（基礎医学）に行ったのであります」と語っているが、明徳会の（高木の）スナオたれという教訓があったにしても彼の素直さにはまったく驚くほかはない。

この高木の「ドブ板またぐような医者……云々」は表現がどぎついため、かつて筆者は「月並みな医者……云々」に直して書いたことがあった。しかし、それを見た久志本常孝教授から「僕が永山先生から聞いたのは『どぶ板またぐような』だったのだけれど」と注意された。「いや、実は私が聞いたのも本当はそうだったのですけれど」といって二人で笑ったことがあった。久志本教授からはさらに「鹿児島には『ドブ板またぎ』という方言があるそうだ」とも教えられた。しかしその後この方言の意味についてはまだ吟味していない。

基礎医学といっても、永山は屍体をあつかう解剖学、病理学は好きでなかった。生理学教室にはいることにした（明治41年9月。主任は生沼曹六教授であった）。その年、教授の生沼は英国に留学したため、東大生理学助教授・永井 潜が講義を代行することになった。また同年、高木校長は生化学講

座を新設して、東大生化学助教授・須藤憲三（済生学舎出身）を講師として招へいた。生理学のなかの化学的分野を生理学から独立させたのである。当時はまだ生化学の講座をもつ医学校はきわめて少なく、既存の12の医学校（国立大学（東大、京大）、国立医専（千葉、仙台、岡山、金沢、長崎）、公立医専（愛知、京都、大阪）、私立医専（慈恵、熊本））の中でも、生化学講座をもつのは東大、京大のみであり、医専にはまだ何処にもなかった。当時としては、これは高木のかなり思い切った決断であったと思われる。

慈恵に生化学講座をつくった頃は、どの医学校も講座名はすべて医化学であったが、その後、生化学に改名するところが多くなり、慈恵でも数年前に明治41年以来の医化学を生化学に改称した。本小論では繁雑を避けるため講座名はすべて生化学に統一した。

永井の講義はどちらかといえば生命論といった哲学的な話が多く、永山はあまり好きでなかった。それに比べて須藤の講義は実験を見せながらの講義で、実際的で分かりやすかった。永山は須藤の生化学の方に親しみを感じ、そちらの手伝いをすることにした。そしてこれが結局永山を生化学者にする動機になった。

高木校長はこの数年の間に、生化学教室の開講のみならず、生理学教室や解剖学教室、病理学・細菌学教室、図書館などの増改築を行なって、盛んに基礎医学の強化に努めている。これはおそらく明治39（1906）年に欧米の医療状況を視察したとき強く感銘をうけた結果であると思われる。この視察旅行の本旨は、日露戦争の勝利に大きく貢献した高木の脚気栄養学説を有名大学で講演するためであったが、彼はその機会に欧米とくに米国の医療（診療、研究、教育）の現状を詳しく調査することにしたのであった。

第二次大戦後、米国の医学はすでに世界の先頭に立っていたが、その米国の医学ももとは19世紀の中頃、ドイツに生まれた基礎医学（研究室医学）を学び、これと臨床医学（病院医学）を結び付けることによって多くの難問を解決していったからであった。高木が訪れた1906年のころは、まさにこの両

医学が火花を散らしながら大きな成果をあげている最中であった。どんな病院にも立派な研究室があり、そこには潤沢な研究費をつかって基礎医学者が忙しく動きまわっていたのである(ここにいる基礎医学者とは全日制常勤のもっぱら研究を専門とする科学者のことである)。そのことは高木にとってよほど印象深かったらしく、彼の「欧米視察談」のなかでも何度も感嘆している。上に述べた慈恵医専のもろもろの改革も、おそらくこの米国での経験から大きく啓発されたものと思われる。

3. 東大生化学へ国内留学

須藤憲三の助手として学生実習などの手伝いをしているうちに、永山は助教(正確には教員補)に任命され(明治43年)、同年生沼教授が帰国してからは生化学の講義(蛋白質、脂質、糖質)を受け持つことになった。責任は次第に重くなるばかりであり、これでは少し本気で勉強しないと教員として大変恥ずかしいことになると思い、須藤講師に東大生化学に留学したいむね再三依頼した(しかし学閥のためなかなか実現しなかった)。ところがなんと今度は生化学教授を拝命することになり(大正2(1913)年9月)ますます焦るばかりであった。幸い翌3年1月からようやく東大生化学への留学が許可され、慈恵医専で講義を続けながら東大で勉強できることになった。そのころ須藤はすでに明治45年からドイツ(ベルリン大学、カイザー・ウィルヘルム研究所)に留学していた。

東大生化学では隈川宗雄(1858-1918)が教授であった。彼は、成医会をつくった大幹部であり高木とも親交のあった隈川宗悦の養子であった。永山が東大に留学するについてはこのような縁故があったのかも知れない。

そのうち今度は高木校長に呼び出され、「君、薬理の講義もしてくれ」ということになった(担当の鶴田鹿吉軍医総監が急逝したためであった)。「いくら先生の命令でも、学生のときの知識だけで講義はできません」「では東大の隈川さんから林さん(林春雄薬理学教授)を紹介してもらって勉強してこい」ということで、こんどは薬理学も一緒に勉強することになった。そんな

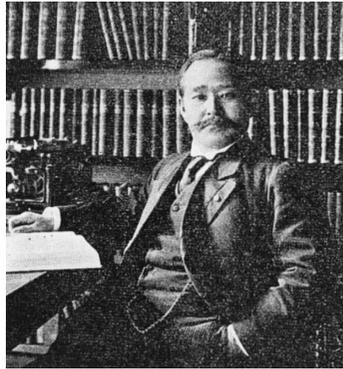
ことで急ごしらえの薬理学教授が出来上がり、大正3年からは東大から帰ってきては薬理の講義もしていたのであった（この薬理学の兼担はその後昭和3年まで15年間も続けられた）。

さて東大生化学での勉強は非常にスムーズに進んでいった。大正3(1914)年1月から6年9月までの3年半余、永山は隈川の指導で生体組織中の脂肪の定量に関する研究を行った（これが彼の最初の論文になった）。また抄読会では Holst-Froelich の壊血病の研究を紹介して、

さらにまたこの追試の研究も行った。これが後の実験的壊血病の研究シリーズ、ビタミンCの研究シリーズにつながるのである。この3年半の間に多くの友人を得ることもできた。末吉雄治(のち慶応義塾生化学教授)、児玉桂三(のち徳島大学学長)らも生涯の親友になった。

永山の東大留学中、隈川は教室の柿内三郎助教授と一緒に、さかんにビタミンB(抗脚気ビタミン)の精製分離の研究を行っていた。しかし残念なことに、隈川はその成功をみることなく、大正7年4月、肝臓癌のため他界した。そのころ Funk や鈴木梅太郎らがすでにこれを分離したとか、結晶化したとか騒いでいたので、隈川もこれに負けずに世界最初の結晶化を夢見ていたのではなかろうか。永山もこの隈川らの寸刻を惜しんで進める激しい研究態度には強い影響をうけた。

しかし不思議に思うのは、この隈川の研究テーマにたいして永山はあまり関心を示していないことである。ビタミンBといえば師匠高木の脚気栄養学説から生まれた物質であり、本来であれば自分こそがその中心になってその精製なり結晶化を行うべき立場にあったはずである。ところが永山にはそのような気持ちがありません(ように見える)。筆者も何度か永山にそのことを尋ねたことがあったが、いつも答えは「高木先生のビタミンBのことは恐れ



日本最初の生化学教授
隈川宗雄 (1858-1918)

多くて、自分はビタミンCで十分であった」というような曖昧なものであった。これは筆者の推測であるが、成功するかどうか分からないような、しかも強敵研究者が多い問題には近づきたくない、といった秀才らしい選択があったのではないだろうか。

しかし一方、高木にも、永山に抗脚気ビタミン（ビタミンB）の研究を続けさせる気持ちはなかったようなのである。不思議な話ではあるが、彼は徹底したプラグマティスト（実際主義者）らしく、脚気が食事の改善で予防、治療できることが分かった以上、これ以上研究する必要はないと思っていたらしいのである。そのことは同じ頃の講演で「脚気病ヲ予防デキルコトハ確カデアリマスカラ、コレ以上分カルコトガアレバ、ソレニ越シタコトハナイノデアリマスケレドモ、病気が起コリサエシナケレバ吾人ハ何ノ必要ガアツテ研究ヲスルノカトイウ考エヲ持ツテイルノデアリマス」と云っていることから推測できるのである（このことは現在のわれわれからみて、高木という人物の理解しづらいところであり、またその後のビタミン学、生化学の発展史からみて彼の欠点であったと思われる）。永山は、このような高木の性質を前もって知っていたのだろうか。

隈川宗雄の履歴を少し追加する。彼は明治16（1883）年、東大医学部（当時は帝国医科大学）を卒業したのち、その翌年ドイツに留学、5年間ベルリン大学のSalkowski教授に師事して生化学を学んだ。明治24年に母校の教授に就任し、同26年、生化学講座担当を命ぜられた。わが国最初の生化学講座担当教授である。留学当時ベルリン大学にはまだ生化学講座がなく、Salkowskiは病理学教室の化学部というところに所属していた。

隈川はドイツで学んだ権威主義的な講座制のあり方を、そのまま彼の生化学教室にもちこんだようであった。そしてこの隈川の教育、研究にたいする姿勢はそのまま永山にも伝えられた。永山の書いた隈川教授の講義風景があるので、ここにその一部を紹介する。

「一同が開講をまつ程に両開きの扉が助手によってサツ開かれ、先生は颯爽として入って来られる。……先生は微笑みを浮かべながら徐ろに講義を始められる。この“徐ろに”はホンの最初の間だけ

で、説き来たり説き進み顔面やや紅潮すると見る時は、既に急行列車の如く、学生がノートをとれようがとれまいが我関せず、化学構造式は次から次へ黒板に書き流れて行く。先生の左右に居並ぶ助手連の黒板を消しては上下する有様は壯観と云おうか、今も忘れ得ぬ思い出の一つである」。

永山にはこういった習慣がよほどカッコよく写ったらしく、この“黒板消し”の習慣は彼も実行し、それは彼の教授在任中ずっと続けられた。

隈川には、しかし、非常に庶民的な一面もあったらしく、素直で和やかな永山は、この大教授・隈川にも私的な親しみをもっていた。当時、永山は大学に近い本郷弥生町に住んでいたが、隈川の住居も同じ方向であったので、隈川はしばしば永山をさそって一緒に帰った。歩きながら隈川は気さくに四方山話を聞かせたが、永山には、そのことより隈川が歩くたびに歩調に合わせて聞こえるカランコロンという音が気になった。それは弁当箱のなかの梅干しの種の音であった。この話は筆者は何度も聞かせてもらったが、話の終りはいつも「君、当時の帝大の教授も生活はつつましかったんだね」ということであった。

しかし最近筆者が知ったところでは、当時の隈川教授の年収は、本俸1,400円、講座給900円、医術開業試験委員費200円、計2,500円であって、けっしてつつましいという額ではなかった（現在に換算すればほぼ2,500万円である）。

4. アメリカ、ドイツの名門生化学に留学

永山は、東大で次々と研究者が留学（当時は洋行といった）するのをみて、自分も留学したい、できればドイツに留学したいと思った（彼はすでに東京外語学校でドイツ語の講習も受けていた）。高木校長が以前「お前は基礎医学へ行け」と命令したとき、たしか「洋行させてやるぞ」と云われたのが彼の耳には残っていた。ところが校長は忘れてしまったのか、いつまでたっても「いよいよ洋行させる」とは云わないのである。

当時、高木校長は「禊の行」という一種の宗教に心酔しており、そのはげしい「行」に打ち込んでいた。そして教師や学生にもさかんにこれを勧めており、これに参加しないものには洋行させない、という噂が飛んでいた。だから永山は東大で時間がとれる限りこれにも参加していた。にも拘らず校長にはそんな素振りがないのである。家の者、親戚の者はみんな、いったい高木さん何をしているんだろう、洋行が実現しないのなら、もう生化学は止めた方がよいのではないか、という意見まででるほどであった。

ところが大正8年1月の“禊の行”が終わったとき、高木は突然「永山、君は禊のお陰で大分たくましくなった、洋行させるぞ」といったのである。待ちに待った洋行であった。ただ慈恵はもともと英語系医学校であり、また高木の考えもあって辞令は「米国に留学を命ず」であって、「ドイツ」ではなかった（高木は先の視察旅行でアメリカの医学の進歩を十分知っていたからである）。校長に「ドイツの方にもやっていただきたいのですが」と願ったが、「ドイツに行くなら自費で行け」ということであった（永山は実際にはドイツにも行っているのであるから、その分は自費でいったのであろうか）。

二年の留学を許されたわけであるが、前半はアメリカのジョンズ・ホプキンス大学の Abel 教授のところ、後半はドイツのカイザー・ウィルヘルム研究所の Neuberg 教授のところの研究することになった。おそらく Abel を推薦したのは東大の柿内三郎（生化学教授）と林 春雄（薬理学教授）であり、Neuberg を推薦したのは同じカイザー・ウィルヘルム研究所に留学した須藤憲三であったと思われる。須藤はもうそのころは金沢医専の生化学教授になっていた。

ジョンズ・ホプキンス大学 Abel 教授のもとで研究

永山は1919（大正8）年4月27日、コレア丸で横浜を出発、ジョンズ・ホプキンス大学の在るボルチモアにむかった。

はじめ Abel の薬理学教室に通い始めたころは、Abel 教授は自分の仕事が多忙であったため、しばらく助教授の Paul D. Lamson と一緒に血液量についての研究を行って時間を費やした。

永山が師事したこの John Jacob Abel は、アメリカの生化学者のなかでもっとも優れた一人であった。Abel の経歴を簡単に説明すると、彼は 1857 年ドイツ系移民の子としてクリーブランドに生まれている。ミシガン大学を卒業後、ジョンズ・ホプキンス大学医学部に入学したが、アメリカの学問のあまりの後進性にいたく失望し、ヨーロッパに 7 年間も留学した (1883-90)。ライプチヒ、ストラズブルグ、ビュルツブルグ、ウィーン、ベルリンなどを渡り歩いて、生理学、生化学を学んだ (今のアメリカからはとても想像できないことである)。そして 1893 (明治 26) 年に、ジョンズ・ホプキンス大学に新設されたアメリカ最初の薬理学教室の教授に任命された。



John Jacob Abel (1857-1937)

教授就任後の Abel の業績はすばらしいものであった。彼の最初の仕事は副腎 (髄質) から血圧を上昇させるホルモンを単離して、それにエピネフリンと命名したことであった (1897)。この仕事はホルモンの単離に成功した世界最初のものであった。彼は腎臓生理学にも興味があったらしく人工透析法 (装置) の開発にも熱心であった (1904. これは面白いことに後の慈大式人工腎臓の製作に発展する。後述)。

彼はまた著名な生化学雑誌である J Biological Chemistry を創刊し (1905), その翌 1906 年にはアメリカ生化学会を結成している。さらにアメリカ薬学会を創立し (1908), その会誌である J Pharmacol and Exp. Therapeutics の編集局長を生涯つとめた。いうならば彼はアメリカの生化学、薬理学の父ともいべき人だったのである (余談になるが、高木がアメリカを視察したのは 1906 年であるから、おそらくこのような生化学、薬理学の力強い勃興をみていた筈である。また永山が Abel の研究室をたずねたのは 1919 年であるから、ちょうどこの研究室がアメリカ生化学、薬理学の中心になった頃だったと思われる)。

さて Abel の指導で行われた永山の研究であるが、それは脳下垂体後葉の血圧上昇ホルモン、子宮収縮ホルモンの化学的本体に関するものであった。まずはじめに後葉中にヒスタミンが共存するかどうかという研究から始められた。そして彼はヒスタミン（ならびにヒスタミン様物質）が後葉に存在することを明らかにすることはできたが、それを三つの論文にまとめた時点で、もうこの研究室を去らねばならなくなってしまった。

その折り Abel はやさしく「君とのこの脳下垂体後葉ホルモンの研究はきっと成功させるから……」といて、永山に続いてここで研究するようにすすめた。しかし永山はドイツのこともあり、したがうことができなかった（はたして永山が去ったあと（1923年）、Abel は期待通り他の共同研究者とともに後葉ホルモンの分離に成功した。永山はよい仕事を逸したのである）。

これに続いて Abel はこんどは膵臓ホルモン・インシュリンの純化に向かっていった（おそらく後葉ホルモンの化学的性質を知ってインシュリンの精製の可能性を直感したのであろう）。多くのライバル研究者を抜いて、インシュリンの単離、結晶化に成功したのは Abel であった（1925）。そして彼はそのインシュリンの本体が実にタンパク質であることもつきとめた（初めてのタンパク質ホルモンであった。Sanger が 1958 年にその全アミノ酸配列を決定したことはよく知られている）。

1923 年のノーベル医学生理学賞は、この Abel の業績の二年前にインシュリンを発見した Banting と Macleod に与えられていたが、もし 1925 年以降になってインシュリンの発見にノーベル賞が授与されたら、必ず Abel がこれに加えられただろうといわれている。

（話が少し逸れるが）はじめ Abel のところで一緒に実験した Lamson 助教授はその後テネシーのヴァンダービルト（Vanderbilt）大学の薬理学教授として転出した。永山とはながく交際が続けられ、慈恵医大とも不思議な関係ができた（これについては後述する）。永山にはどこへ行っても友人をつくる非凡な才能があった。

昭和 32（1957）年 9 月、Abel の生誕百年記念祭がボルチモア市で盛大に举行された。そのさい日本人門下生中唯一の生存者であった永山は、依頼され

て Abel の思い出を書き送った。

学会での活躍、著名な業績とはうらはらに、Abel の研究生活にはどこかヨーロッパ風とでもいうか、きわめて優雅でのんびりしたところがあった。永山によると「先生の実験中は来客は極めて稀で、あっても立ち話ですまされた。……実験室には一人の助手もおらず、自ら試験管を持って研究しておられた。ただ動物実験の準備だけは長年勤務した二人の補助員が実に立派にやっていた。例えば血圧測定の実験では、補助員がキモグラフィオンに描写するばかりにして待っているところへ、先生は検体液を入れた注射器をもってこられて静注する。そして描写曲線を眺めつつ殆どの場合“fine”と叫ばれた。……実験中手術着のほか常に常に矩形の白い帽子を冠っておられたが、それが先生には大変よく似合うのであった。小試験管に微量の検体液をとり、薬品を加えて反応を観るのに、窓際の明るいところで、その試験管を高く挙げ、タメツ、スカメツ観察されるのが常であった。また冬は例の反応液を入れた小試験管を窓際に積もった雪の中に差し込んで冷却するという風流らしいこともされた。……朝は9時ころから実験室に入られて直ちに実験に着手され、昼は午睡後、昼食に行かれるが、その後再び5時頃まで研究を続けて帰宅されるのがまるで判で捺したようであった。……講義の如きも Lamson 助教授と Macht 講師が一切引き受けて、Abel 先生は年に一週間ぐらい最も得意とする、例えば Epinephrine, Histamine, 脳下垂体ホルモンなどについてのみ講義されるにすぎなかった」という。Abel がピカピカのガラス器具と綺麗な反応液をつかって悠然と実験しているさまが目に見えるようである。

永山はかつて、筆者がホモジェネートをつかって実験しているのをみて「君の実験は雑巾バケツを掻きまわす様な感じだね」と評されたことがあったが、おそらくこの Abel のきれいな実験と対照的だと思ったのであろう。

もう一つ Abel が永山に告げた話をここに追加する。高峰譲吉は、Abel のエピネフリン単離に続いて、その結晶化に成功した人であるが(1900)、彼がかつて Abel の研究室を訪ねたとき、Abel はエピネフリンの単離のこつをすっかり話したらしい。高峰の結晶化がその直後であっただけに、Abel は、高峰の行為は紳士的でない、といっ

て永山にこぼしたという。

カイザー・ウィルヘルム研究所 Neuberg 教授のもとで研究

永山は、1920（大正9）年6月、Abelに別れを告げて、ベルリン・ダーレムのカイザー・ウィルヘルム研究所に向かった。本論に入る前にこの研究所の歴史について簡単に説明しておく。ウィルヘルム二世はドイツ帝国を強大にするためにビスマルク以上に科学と技術の振興に努めていたが、20世紀になってから、それまで教育、研究の中心であった大学がもはやその機能を果せない状態に陥っているのを知った。その理由は、教授をはじめ研究者の多くが雑用に追われて研究に専念できなくなっていたことにあった。これを解決するには、新たにどこか広い土地に（できればベルリンの郊外に）大きな研究所をつくり、研究に専念できるようにすることであった。このようにしてベルリンをふたたびドイツのみならず世界の科学のメッカにしたいと考えたのであった。場所としてはウィルヘルム二世が提供したベルリン・ダーレムの地にし、時期としてはベルリン大学創立百年を記念して設立することにした。また国立にすると組織が硬直化しやすいので、パスツール研究所のよ

うに財団立にすることにした。こうして専門別研究所が次々と建てられていった。カイザー・ウィルヘルム化学研究所(1912)、同実験治療研究所(1913)、同生物学研究所(1915)、同物理学研究所(1930)、同細胞生理学研究所(1931)などである(第二次世界大戦後、このカイザー・ウィルヘルム研究所はマックス・プランク研究所に改称された)。

永山がおとずれたのは、このカイザー・ウィルヘルム実験治療研究所であり、所長は梅毒反応で有名な Wasserman であった(彼は1925年に死去したため、生化学部長であった Neuberg



Carl Alexander Neuberg
(1877-1956)

が所長に昇格し、研究所名もカイザー・ウィルヘルム生化学研究所に変わった).

永山が師事したこの Carl Alexander Neuberg についてもここに簡単に説明しておく. Neuberg は 1877 (明治 10) 年 7 月, ドイツのハノーバーに生まれたユダヤ人であるが, 母親の家系は生化学者 Otto Meyerhof (解糖系を解明) や Hans Krebs (クエン酸回路を発見) と縁続きであった. Neuberg は ヴュルツブルグ大学とベルリン大学に学び, 学位論文は Virchow の病理学研究所での発酵・解糖の研究であった. 彼はベルリン農科大学の教師になり, 1906 年にはその生化学教授に就任した. 当時まだ 28 歳であったが, 生化学雑誌 *Biochemische Zeitschrift* を創刊し, 文字通り新興の生化学の若いチャンピオンになった. この *Biochemische Zeitschrift* は当時もっとも権威ある専門誌に発展していった.

永山はまたもや世界的に著名な学者に師事することになったのである. 永山が師事するまでの Neuberg の仕事を簡単に説明しておく, 彼はそれまでに, 酵母による発酵過程でピルビン酸はアルコールと二酸化炭素になること, しかもピルビン酸はまず初段階でアセトアルデヒドと二酸化炭素に分解することを証明していた. そしてこの反応を触媒する酵素をピルビン酸カルボキシラーゼと命名した (1911. 発酵・解糖過程で最初に発見された酵素であった). アセトアルデヒドが還元されてアルコールになることはすでに知られていた.

永山が Neuberg のところを訪れたとき (1920), ドイツは第一次世界大戦 (1914-18) に敗れた直後であったため, 不自由なこともあったが, それでも彼はこの酵素, ピルビン酸カルボキシラーゼの重要性を示す多くの実験を行うことができた. 酵母を含めて総ての微生物がこの酵素をもち, しかも効率よくピルビン酸をアセトアルデヒドに変換することを示して, この酵素反応が発酵の主要経路であることを実証したのであった (その後の生化学の歴史が示すように, この酵素は好氣的生物ではピルビン酸をエネルギー産生系であるクエン酸回路に入れこむ重要な酵素であることが明らかになった). 永山はよい時期により研究に遭遇したものである.

Neuberg はこのピルビン酸→アセトアルデヒド→アルコールの発酵経路

を明らかにした後、こんどはブドウ糖からピルビン酸に至るまでの経路を追究することにした。まずブドウ糖が分解してできる物質は何かということである(それが分かれば発酵の全過程が分かるはずであった)。Neuberg が注目したのは、ブドウ糖を(酵母でなく)アルカリで分解するとき生成するメチルグリオキサルという物質であった。このメチルグリオキサルは、酵母によって分解(発酵)されないことが知られていたにもかかわらず、Neuberg は強引にこの物質をブドウ糖とピルビン酸の間の中間物と考えたのであった(236頁「ノイベルクによる発酵経路」参照)。その根拠は化学的見地から考えて魅力的中間体であるというだけであった。このような根拠薄弱にもかかわらず、このメチルグリオキサル中間体説は、不思議なことに、彼の権威によって実に1913年から20年間も発酵経路の定説としてひろく認められた。それはNeuberg の、他の批判を許さない厳しさと、ドイツの学問的権威に対する寛容によるところが大きかったのかも知れない(彼は多くの若い世代の生化学者に恐れられていたと云われる)。

Neuberg は数回ノーベル賞候補にあげられたが、ついに受賞にはいたらなかった。とくに1929年度のノーベル化学賞は、発酵に必要な助酵素の研究でHardenとEulerに授けられたので、多くの生化学者は、(メチルオキサル説はまだ生きていたし、その上)少なくとも発酵の重要な経路、ピルビン酸→アセトアルデヒド→アルコールを発見したNeubergが共同授賞しても当然と考えていた。しかしそうならなかったのはスウェーデンにドイツの権威主義を嫌う雰囲気があったためともいわれる。またしても永山はノーベル賞受賞という荣誉ある仕事に参加できなかったのである。

1933年1月、ドイツにHitler政権が樹立され、ユダヤ人の公務追放令が公布された。翌1934年、ユダヤ人であったNeubergはカイザー・ウィルヘルム生化学研究所所長を辞任した(代わりにButenandtが所長になった)。そして彼は阿姆斯特ダムに逃れ、イェルサレム、インド、ニューギニアをへて、1941年1月カリフォルニアに到着した(65歳であった)。それからニューヨーク工科大学に新しい職場をもとめ、そこで静かに研究を続けることにした。しかしその後はあまり報われることなく、1956年5月、不遇のうちに肺炎で世

を去った。著書6冊と900編の論文が残された。この残された論文のなかに永山の論文一編もあったはずである。

(余談に類するが)永山がNeubergのところに行ったとき、日本から清水多栄(岡山医専生化学教授)と富田雅次(長崎医専生化学教授)が訪ねてきた。モアビッツ病院のJacobに紹介してほしい(つまり先輩として通訳してほしい)ということであった。そしてそこに同道すると、富田はJacobに積極的にしゃべろうとしたが、清水はむっつりとしゃべらなかつた。Jacobは富田を採用して清水をフライブルグ大学の胆汁酸の研究者Wieland教授に紹介した。そして清水はそこで精力的に胆汁酸代謝を研究し、帰国後も生涯それを続け、充実した学者生活をおくることができた(岡山大学学長、帝国学士院賞、勲一等瑞宝賞受賞など)。永山が常に云うには「人の運命というものは分からないものだ、清水君もJacobのところではなく(そこを断わられて)、Wielandのところに行ったからこそ、あんなに立派な仕事のできたのだ」と。

酵素化学の領域でMichaelis定数として有名なMichaelisはかつて県立愛知医大(のちの名古屋大学医学部)の生化学教授を4年間(1922-'26)つとめた。これは愛知医専が1920(大正9)年に大学に昇格したのを記念しておこなった思い切った人事であった。はじめNeubergがこの人事に招かれたのであったが、彼はこれを辞退し、同じユダヤ人のよしみでMichaelisを推薦したのであった。

永山がNeubergのもとを去るとき(1921年2月)、Neubergは永山に、日本の勲章を何とか自分に与えるよう国に働きかけてくれなにかと依頼した。永山にはその意味がまったく分からなかったらしいが、このMichaelisの件と時期が重なるだけに何か関係があったのだろうか。

5. 関東大震災と大学復興

高木兼寛は大正9(1920)年4月13日に逝去した。永山はまだAbelに世話

になっている時であった。厳しい実父を亡くしたような深く悲しい知らせであった。

永山は Neuberg のところで研究を続行したのち、イタリアから諏訪丸で大正 10 年 4 月 27 日に帰朝した。不思議なことに出発から満二ケ年の同月同日に当たっていた。同 10 年 10 月、慈恵医専は東京慈恵会医科大学に昇格したので、同時に永山は同大学の教授に任命された。

大正 10 年 9 月、金杉学長は大学附属研究所を設立し(二階建延 249 坪)、そこに生理部、組織部、生化学部、病理部、細菌部、血清部などの各部を設けた。実はそのとき初めて間借りでない生化学教室ができたのであった。そして初めて一人の助手(横田寿照)と七人の研究生(青木甲午郎、宗久 佐、往西 彰、長岡 博、河合健吉、大川恭徳、西田芳雄)を採用することができた。

しかしようやく落ち着き、これから教育、研究に専念しようとした矢先、大正 12 年 9 月 1 日、関東大震災が勃発した。そして大学も病院も何もかも総て灰燼に帰してしまった。研究所が完成してからまだ 2 年も経っていなかった。

慶応義塾大学医学部で生化学研究を続行

がっかりした永山はかつてお世話になった東大はどうなっているかを見に行くと、赤門のところで親友の末吉雄次(前出)にばったり出会った。「君のところはどうした?」と末吉がいうので、「全部焼けてしまった」と答えると、「それはいかん。それじゃ僕の方は焼けていないから、慶応に来たらどうだ」ということになった。そして有り難いことに、慶応の北島多一医学部長の承認を得ることもできた。こうして大正 12 年の 10 月 20 日から慶応の生化学教室に助手一名と研究生七名を引具して移り、永山も一室を借りることになった。大正 14 年に慈恵の仮校舎ができるまで、実に一年半のあいだ慶応義塾(とくに末吉)には一方ならぬ世話になったのである。しかもその間に末吉と研究生との共著論文までいくつか出しているのである。

永山と末吉の友情はこれを期に一層強くなり、何をやるにも二人ですることになった。生化学会総会には大正 13 (1924) 年以降常に必ず二人で参加し、

常に必ず二人並んで講演をきき、常に必ず二人一緒に見学の旅をしてきた。駅弁は二人分買うのだが、健啖家の永山は一人分では足りず一個半食し、身体の小さい末吉は半分で済ませた。ある学会の折り、内野仙治（京大生化学教授）から、お二人は「お神酒徳利（オミキドックリ）」のようですねと評されてから、このニックネームは学会のなかでは知らぬ人がないぐらいになった。しかもこの二人にはさらに二人の親友、児玉桂三（徳島大学学長）と清水多栄（岡山大学学長）がおり、これを四人会と自称して生涯親交を続けた。

昭和39年9月20日、上野観光閣で、末吉と永山の長い交友を記念して慶応生化学同窓会と慈恵生化学同窓会の合同で「末吉・永山両先生交友五十年記念祝賀会」なるものが催された。大変盛会であった。（慶応義塾は今でも生化学教室ではなく医化学教室であるが、本小論では話を単純にするため生化学教室にした）。

ここで思い出すのは、高木兼寛が永山ら学生に与えた大和魂の本質、スナオ（素直）についての講義である。「素直とはつまり真っすぐということである。真っすぐなものはいくらでも沢山合わせることができる。何万本あっても合います。然るに曲がったものは僅か二本でも合わせることが出来ませぬ。真っすぐなものが合うのを和すると申します。大和という字は和合して離れぬことを云うのであります」と。

ヴァンダービルト大学そっくりの大学を建設

関東大震災による大学の惨状を前にして教職員も学生も呆然自失の状態が続いた。しかし、50日後の10月20日、荒寥たる廃墟の校庭に金杉学長以下教職員、学生全員が集まり、悲壮な始業式を行なった。学長はその席で「宜しく天の試練に耐え忍び、校舎、設備悉く焼け失せたりといえども、慈恵学園四十余年の伝統と精華は些かなりとも揺るぎはせぬ。学長以下当事者は、今や鋭意復興に努めつつある」旨を述べて全員の奮起を促した。そして、一同はこれに應えて、涙とともに慈恵医大万歳を唱え、復興の決意をたしかめあったのであった。

最大の問題は復興の資金を如何にして捻出するかということであり、学長

以下当事者は卒業同窓生の寄付をもとめて地方行脚をくりかえした。また少ない資金をいかに有効に使い、いかに節約に徹するかということも重要課題であった。

大学再建についてのある会合で、金杉学長は突然、「どなたか建築の青写真(設計図)をタダで作って下さる方はいないだろうか」と問題提起した。さすがにこの無理な注文にはしばらく沈黙が続いたが、そのとき永山には二つのことが閃いた。一つは自分の甥、野村茂治がたしか京大工学部を出たばかりであり、彼だったらタダでやってくれるかも知れない、ということであった。もう一つは、どうせ作るなら、アメリカ、テネシーのヴァンダービルト大学(Vander built University. 南のハーバード大学と言われる名門)の様なのが良いということであった。この大学は、かつて Abel のところで一緒に研究した Lamson が薬理学教授として転出したところであり、彼が前にくれたその大学の絵はがきが永山には大変気に入っていたのであった。それらを思い、二、三日の猶予を乞うて一応「タダの設計図」を引き受けた。早速、野村を呼び、「この絵はがきのような大学を設計して欲しいのだ、しかもタダでだ。何とかたのむ」と頭を下げた。野村も大学を出たばかりでもあり、しかも叔父の頼みということもあって、この無理な注文を引き受けた。永山はそのこともあって大いに彼の面目を施すことができたのであった。野村は後に千葉工大の教授になった。

これでヴァンダービルト大学そっくりの大学が出来ることになったのであるが(昭和8(1933)年6月完成)、やはり建築費の方は不足がちで、野村の設計図通りにはいかないところもあった。その一つは窓の構造で、(永山によると)設計では窓の開閉は(電車の窓のように)上下することになっていたのだが、資金不足のため今のように外に押し出す不恰好な構造になってしまったのだという。

かつて筆者は在米中にヴァンダービルト大学のある研究者を訪ねたことがあった。慈恵の建物との関係はすでに永山から聞いていた。大学をみてそのあまりのそっくりなのに驚いてしまった。H字型

の全体の構造はもちろん、レンガの色合い(モザイクの仕方)、窓の配置まで、すべてが全く同じなのである。あまりのことに筆者はただ笑うしかなかった。絵はがきの由来からして同じになるのは当然かも知れないが、それにしても兎に角あまりにそっくり過ぎるのである。ただ地表が慈恵の場合はアスファルトであるのに、ヴァンダービルトのそれは綺麗な芝生であった。

6. 生化学教授時代

永山は大正2(1913)年に教授に就任しているので、(定年退職する昭和26(1951)年までの)実に38年間この職にあったわけである。はじめ国内留学、国外留学、それに関東大震災などでかなりの時間を費やしてしまったが、それを無視しても昭和の始めから退職まで25,6年にはなるであろう。この間に多くの学生を教育し、また多くの研究者(約160名)をそだてたのである。

また永山は、日本生化学会、同関東支部会の結成(大正14(1925)年)にも参加した最も古い生化学会会員でもあり、また昭和10(1935)年には生化学会総会長として慈恵医大を会場として活躍もした。そしてこのような生化学会への貢献によって昭和33年には同会の名誉会員にも推薦された(親友の末吉雄次も同時に推薦された)。永山は昭和40年ころまでは生化学会総会には必ず出席し、学会の大先輩として常に敬愛された。懇親会では必ず司会者から乾杯の音頭を指名され、彼はそれを大変光栄におもい、また粹なスピーチで後輩生化学者たちを大いに楽しませた(直接教育を受けた筆者などは大いにプライドを感じたものである)。

参考書「医化学」を刊行

先にも述べたが、永山は東大の隈川教授のやりかたにならって、講義は助手連の“黒板消し”を実行した。講義そのものはもちろん後世まで知られる名講義であったが、何分にも黒板に書かれる構造式の数が多く、また矢印で続

く代謝経路、さらに掛け図の図表などに気をとられて、学生たちはノートをとるのが精一杯で、内容を理解することができなかった。そこで永山は、教科書的なものを学生にあたえたら、自分の講義をゆっくり理解してくれるのではないかと考えた。それまでに講義用の原稿は相当溜っていたし、執筆はそれほど困難ではなかった。彼はその著書を、慈恵医大創立五十周年を記念して、昭和8(1933)年に刊行した。書名は「医化学」、A5版、443頁、発行所は明文館であった。

この永山の「医化学」以前に出版されていた参考書といえば、柿内三郎の「生化学提要」(大正12(1925)年)であったが、その後はこの「医化学」がベストセラーを続け、昭和25(1950)年の第十版まで次々と改訂され、頁数も増え続けた。

この「医化学」と柿内の「生化学提要」(710頁)とを比較すると、はっきりしているのは、「医化学」の方がずっと動的な感じがすることである。生化学提要が生体成分の化学(糖質、脂質、蛋白質の化学)に重点をおき、また溶液論をふくめた物理化学に力点をおいているのに対して、医化学の方は栄養素の消化吸收ならびに中間代謝(その結果としての尿成分)に力点がおかれ、さらに中間代謝に対する内分泌の調節作用などにも注目しているのが特徴であった(いうならばまさに Medical Chemistry そのものであった)。両書におけるこれらの大きい相違は、発行年の違い(1925年、1933年)、つまりこの間の生化学の著しい発展(とくに酵素化学、中間代謝学の発展)によるものと考えられる。とにかく永山の「医化学」は、当時の先進的生化学書であったし、また戦前、戦中、戦後を通じて最も多くの医学生に読まれた生化学参考書であった。昭和27、8年までの医学生でこの書の世話にならなかった人はほとんどいなかったのではないかと思われる。

多くの研究業績

先にも述べたが、永山の研究を含めた実際の教授生活は昭和に入ってから25、6年間であったと思われるが、その間に印刷された研究論文はじつに500編ほどにもなった。このうち永山自身の自著共著論文はわずか25、6編に

すぎないから、その大部分（95％）は彼の指導論文ということになる。しかもその指導を受けた研究者（160名）の大部分（9割）は学位をもらうために集まった研究生であるから、殆どの論文は研究生の学位論文であったといってよいだろう。そのピーク時（昭和10年頃）でみると年に30編もでており、これから推測すると年に10人もの学位をだしていたことになる。

論文の研究領域は非常に広く、大雑把にまとめても①ビタミンCに関するもの、②腎の排泄機能に関するもの、③胆汁酸、コレステロールの薬理作用、④クレアチン、クレアチニンの分布、⑤ヒスタミン、エピネフリンの分布、⑥馬尿酸生成（肝機能）の検討、などになるであろうか。このうちビタミンCの研究が全体の半分、次の腎の研究が1/4、残る③-⑥が残り1/4になる見当である。

ここでは論文数も多く、また有名でもあるビタミンCの研究について少し論評することにする。このビタミンCの研究は、東大留学時に抄読会で紹介した、モルモットをカラスムギで飼育すると壊血病を起こすという「Holst-Froelichの壊血病の研究」がそもそもの動機であった。永山のビタミンCの研究で最も多いのは、壊血病モルモットの各組織成分の変化をしらべたもので、その分析対象は血中の脂質からアセトン体、糞中の脂肪酸、コレステロール、尿中の乳酸、糖、さらに白血球像、赤血球抵抗などまで、その範囲はきわめて広い。次に多い研究は、動物にいろいろな生理的、病的条件をあたえて、その時の体内ビタミンC量の変化を調べたもので、その条件としては薬物をあたえたり、アチドージスにしたり、アルカロージスにしたり、レントゲン線を当てたり、飢餓にしたり、これまたきわめて多種多様である。論文数は少ないが比較的まとまっているのは友井敏夫らの「尿中ビタミンCの定量」であろうか。Biochemische Zeitschriftに2報掲載している。



教授時代の永山武美

多くの論文を一括して論評することは至難であるが、筆者の印象からいえば、次々と入室してくる新しい研究生を相手に指導するせい、当の研究生があまり苦勞しなくても済むような研究テーマを与えていることである（研究生とは、先述のように学位を授与されるために数年間研究し、授与されれば研究とはあまり関係ないもとの診療の現場にもどる医師たちのことである）。

ところが永山が活躍した同じ1925-50年の世界におけるビタミンCの研究の状況といえ、凡そ次のように華やかなものであった。まず①野菜、果物の中に壞血病を予防する因子があるらしいこと（1925-28年）、そして②その結晶化から化学構造が明らかになったこと（1930-33年）、もちろん③その定量法も確立され（1930-40年）、さらに④生理作用のいくつか、例えばチロジン、フェニールアラニン代謝に必須であること（1939-48年）などが次々と明らかになっていたのである。

これをみると永山の研究は、つまるところ、このような世界の研究の流れには、あまり大きい影響を与えることはできなかったのではないだろうか。アカデミックな生き方を望んでいた永山のことであるから、このような流れに入り、先駆的な仕事をしたかったのであろうが、現実の研究者の力を考えれば、それには目をつむらざるを得なかったのではないだろうか。戦略的研究を目指しながらも戦術的研究に終始せざるをえなかったというのが現実だったのかも知れない。

先に、永山はビタミンB1の研究にも消極的であったと述べたが、その理由もこれと同じであったのかも知れない。しかしこのビタミンB1の研究は、永山にとっては（高木との関係のみならず）、かつてNeubergのところで研究した酵素、ピルビン酸カルボキシラーゼとの関係もきわめて深く、無関心ではいられなかった筈である。例えば、その頃ビタミンB1欠乏動物では、この酵素活性が低下することが明らかになり（1935）、さらに同酵素は補酵素を必要とし（1932）、しかもその補酵素の構造中にビタミンB1が含まれていることが明らかになった（1936）のである。つまりこのことから脚気病のメカニズムが、ビタミンB1の欠乏→補酵素の減少→ピルビン酸カルボキシラーゼ

活性の低下→クエン酸サイクルの減速→エネルギー (ATP) 産生の不足→神経麻痺 といった具合に説明されることになるかも知れないのである (これら 1930 年代の出来事は、栄養学と酵素化学を結びつける新しい生化学の幕開けになった)。そしてその頃は永山も生化学会長などもやり (1935)、生化学者としてもピークにあった筈である。何となく気になることでもあり、また淋しい気もしたのではないだろうか。

学生の教育、研究生の指導、さらに大学の理事職、学会の役職などで多忙になったことも永山が本格的な研究に専念できなくなった理由かも知れない。ここで頭に浮ぶのは、20 世紀最大の生化学者と称された Warburg のことである。彼はカイザー・ウィルヘルム研究所の細胞生理学研究所長であったが、信頼できる研究補助員とのたった二人で、雑務に煩わされることをすべて拒絶しつつ、質の高い研究をなし続けたのであった。そして 1931 年には、「呼吸酵素の発見」でノーベル医学生理学賞を受賞したのである。その後も、彼はユダヤ人であったためナチの高官を籠絡しながら、歴史に残る先駆的な業績を次々とあげ続けたのであった。

高木と永山の科学哲学

高木が脚気病の治療、予防のためには、もう一度勉強し直すしかないと考えて、英国に留学したことはすでに述べた。そして帰国後は、英国で学んだ疫学的方法を基礎に、脚気の原因が栄養のアンバランスにあることを発見したのであった。彼の哲学は、診療現場からの問題を研究し、その成果はまた直ぐ現場で役立てられる、といったプラグマティズム (実際主義) そのものであった。

この高木の考え方にたいして、永山の場合は、留学は生化学者として大成するためであり、研究テーマは文献を読んで興味深いものをピックアップしたものであり、また研究成果はもちろん医療現場に返されることなく論文として発表され、生化学者として評価されるのである (アカデミズム)。

研究の動機はもちろん千差万別であって、全く自由であってよいはずである。佐藤文隆 (宇宙物理学者) によると、研究動機は ① 知識欲、② 名誉欲、

③ 実用性、④ 国などの威信 の四つに分類されるというが、これによると高木の動機は ③ 実用性 (プラグマティズム) に、永山のそれは ① 知識欲、② 名誉欲に分類されるであろうか。

しかし筆者には、研究の動機はさておき、すぐれた研究成果には何かそれなりの共通性があるように思われる。簡単に云えば、すぐれた成果には研究者自身にはもちろん、それを見聞する他者にたいしても、ある感動をあたえるものである、ということである。かつてダーウィンが進化論を発見したとき、親友に「何だか殺し (murder) を打ち明けるような気がするが……」とことわりながら話はじめたというが、そのとき彼には不安ではあるが告げずにはおられないある感動を覚えていたのではなかろうか。そしてそれを聞いた親友もそれとよく似た興奮を覚えていたに違いないのである。高木の場合にもおそらく、親しい人には「脚気の原因がやっと分かった。食事を改めれば治せるし、予防もできる。世界中で自分だけがこれを知っているのだ」と云いたかったのではなかろうか。

しかし永山の場合にはどうであろう、彼の指導した論文は数多いが、不安でときどきしながら知人に告げるようなことは少なかったのではないだろうか。質よりも量にならざるをえなかった気がするのである。

この傾向は今でも日本では続いているらしく、日本の科学論文は、論文の数では世界3位なのに、論文の引用度では20位に近いレベルにあるといわれる。価値観の変更が望まれるわけである。

ノーベル賞の選考会では、このあたりの評価基準ははっきりしており、「授賞対象は、最初に発明、発見したのは誰かということであり、単にいい仕事をたくさんした人ではない」とされている。

高木と永山には、それぞれ山師型と能吏型の学者を当てはめることができるかも知れない。山師型とは言葉は悪いが、広漠とした原野に一つの鉱脈をみつける勘のようなものを持ち合わせる人物であり、このタイプには能吏としての几帳面さはない。しかしいったん発見された鉱脈から鉱石を掘り出すのは能吏型の仕事であり、山師型の仕事ではない。この二人の研究ぶりの違いをこのように分けるとよく分かるような気もするのである。

面白いことに、高木は臨床医の基礎医学的研究を好まなかった。「臨床医家には病者を救う研究こそが本義であり、学理的研究の要があれば、それぞれの基礎医学者の指導の下になさるべきである」としたのであった（つまり二兎を追うな、一兎に専念せよ ということであろう。そして臨床と基礎の共同研究を望んだのである）。

云うまでもなく医学は、人体の科学的認識つまり「基礎医学」に基礎をおくがゆえに科学である。しかし医学の対象はあくまでも病という悩みをもつ人間であり、したがって医学の舞台はあくまでも「臨床医学」であるといつてよいだろう。むしろ医学とは、病む人間を対象とする総合的技術であるといつてよいのではなからうか。

臨床の現場から、ある距離のある基礎的な問題については、基礎医学者の指導の下で、ないし共同研究という形で行うべきであり、臨床医家はもっと自分の技術の習熟改良に専念すべきであるというのが高木の言い分なのである。このことは臨床医の医療技術に期待する患者の側にとっては大変有り難い提言なのである。

高木の提言は、おそらく明治 39（1906）年に彼がアメリカの医療を視察したときに受けた強い印象からきているのであろう。当時のアメリカは、ドイツに学んだ基礎医学と、それまでに蓄積した臨床医学を統一して、世界をリードする高度の医学に発展しつつあった。高木は、この臨床医家と基礎医学者が強力に共同研究している現場を実見したのであろう。ここにいう基礎医学者とは、云うまでもなく全日制常勤の専ら研究を専門とする科学者集団のことであり、PhDのような医師（MD）以外の研究者も含むことは云うまでもない。

現在、アメリカ医学が世界の先頭に立ち、その後方を日本が走っている。しかもその隔たりは（高木が視察した頃から）あまり詰まりそうもない。これはアメリカでは臨床、基礎の協力関係がうまくいき、日本ではそれがうまくいかなかったためではないだろうか。次にあげる数値は、筆者が最近、国際医学雑誌でしらべた、MDとPhD（などMD以外の研究者と）の共同研究の割合である（しらべた雑誌は1999-2000年のArthritis & Rheumatism, Cir-

cultation, Diabetes Care, American Journal of Kidney Diseases など研究者の出身まで書かれている 4 誌であるが、いずれも傾向は同じであるので、ここには Arthritis & Rheumatism の約 300 の論文についての数値のみを示す)。

アメリカ	76%	イギリス	96%
ドイツ	66%	日本	20%

日本からの論文はこのように共同研究が少ない上に、研究者の殆どが MD であり、しかも単独の研究室からの報告が殆どであった。かつて日本が模範としたドイツでも過半数の論文が共同研究であることは注目すべきであろう。慈恵医大の論文では数値はさらに小さく、いっそう純系ではなからうか。

「慈大式人工腎臓」について

この人工腎臓の研究は、高木が期待した共同研究のよい例であると思われるので、ここに簡単に紹介する。

昭和 32 年の春頃、泌尿器科の南 武教授から永山一門の久志本常孝助教授(当時)に、人工腎臓を開発したいのだが、力になって欲しいという依頼があった。

久志本はその依頼にこたえて、泌尿器科の若い医師、細部 一、三木信男らと一緒に共同研究を始めることにした。久志本はかつて永山教授の講義で、Abel (前出) が大型の透析器をつくり、それを動物(兎)にとりつけ血液成分を透析したという話を聞いたことがあった。その時、透析なら Abel のような自然透析でなく(電場をあたえて荷電粒子を引っ張り出す)電気透析の方が効率はるかによく、小型化が可能になる筈なのに と思ったという。

久志本が依頼されたころの人工腎臓は、この Abel の自然透析をそのまま踏襲したものが多く、面積の広い透析膜(セロファンチューブ)をつかい、そのため膜が破れやすく、また装置全体がどうしても大きくなってしまったのであった。そこで久志本は泌尿器科の先の若い医師たちと一緒に、小型の電気

透析器を自作し、その効力を動物（犬）をつかって実験し始めた（この装置はのちに慈大式人工腎臓と名づけられた）。次々と改良試作される電気透析器は動物で着実に成功していったため、いよいよ人間用の器械をつくる段階になった。そして昭和34年8月に遂にその試作に成功した。

最初の臨床実験は、睡眠薬自殺をはかり内科に入院し、しかも3日間昏睡を続ける中年女性の患者で行われた。結果はこの人工腎臓でのわずか30分間の透析で、この患者は劇的に覚醒し、3日後に退院することができた。その後、共同研究者・細部一らは急性腎不全の患者があればただちにこの慈大式人工腎臓を持参して患者を訪れ、透析を行い、多くの患者を救うことができた（詳細は原著参照）。

この電気透析を原理とする人工腎臓のプライオリティーは国際的にも高く評価されたが、昭和40年代になってからは、透析膜素材の改良、透析膜チューブの毛細化の成功によって、（電気透析によらなくても）小型化が可能になったため、この慈大式人工腎臓の需要は次第に減っていった。

それにしても基礎医学者と臨床医学者が共同して独自に展開した慈大式人工腎臓の研究は、高木兼寛がのぞんだ医学研究の典型として今後も注目してよいのではないかと思われる。

7. 慈恵医大学長時代

終戦により昭和22年4月から東京慈恵会の制度が変わり、それまで慈恵会から診療のみ依頼されていた東京慈恵会医科大学は、これからは診療はもちろん他の一切の経営の責を負うことになった。大学の責任が非常に重くなったのである。

当時の学長は高木兼寛の長男・高木喜寛であったが、健康を害し、同22年10月をもって辞任した。そして同年12月、永山武美が全学の要望によって学長に就任することになったのである。高木兼寛のお声がかかりで慈恵に因縁をもつ大先輩として、また慈恵全体にとってもっとも相応しい人物として推薦されたのであった。

その頃、永山は一身上の悲しい出来事に沈んでいた。生化学教室の講師で、生化学者としての将来を嘱望されていた次男の永山 正(昭和13年本学卒)が、ニューギニア方面で戦死したのである。昭和18年の阪大での生化学会総会では、ビタミンCに関する研究を二題提出していたが、軍医予備員として応召することになったため父・永山武美が代講したのであった。しかもニューギニアに向かう船団が偶然その大阪港から出発したため、大阪ホテルの裏玄関で息子と握手して別れたのがそのまま永遠の別れになってしまった。その時は、戦死して帰るなどは夢にも思わなかった。

当時の永山の悲しみは大変なもので、同じ南方戦線から復員してくる大学の教職員に会うたびに、誰彼なく「自分の息子は戦死したのに、どうして君が……」という感じで苦衷が告げられ、帰ってきたのが何か悪いことでもしたかのような気がして復員者は辛かったといわれる。

永山にはしかし、このような一身上の悲しみのほかには、終戦による思想的挫折感とか思想的苦悩といったものはあまりなかったようであった。次に示すのは終戦を中心に永山の数年間の発言、講演を並べたものである(永山の随筆集より)。

[終戦 2 年前。慈大新聞]

「今や聖戦完遂のため確固不動の理念の下に、一意邁進すべきである。……而して我が学園は戦いに立つべき軍医の養成に重大使命を負うと共に、大東亜共栄圏各地に渡りて治病、防疫等あらゆる医事方面に進む人材の輩出にも努力すべきである」

[終戦直後。開校式式辞]

「戦局我れに利あらず、遂に畏くも陛下御自らの御放送を臣等一同謹みて拝聴し感涙滂沱として止まらず……帝国臣民は全力を尽くせども遂に力及ばず今日の結果になったことは臣子として恐懼に堪えぬ所である」

[終戦の翌年。始業式式辞]

「今や軍国主義を一蹴して新しい文化国家を建設することになったことは、真に喜びに堪えない。……米国の民主主義が国民のなかに浸透することは国家の文化的発展のために誠に慶賀すべきことである。……また米国が飢餓民衆

に食糧を放出していることは、之蓋民主主義より湧出する博愛精神の発露である」

これら三つの発言を並べてみると、その思想の変化のはげしさに驚くほどである。しかもこのような変化がわずか2,3年のあいだにおきているのである。

しかし当時の日本の知識人の多くはこのようであった。おたがい変化の無節操をそれほど恥じる気配もなかったし、またこれを正面から批判できる自信のある人もいなかったのである。多くの哲学者、宗教家にもこのようなことは随所にみられたものである。永山自身もこれらの論旨の矛盾をあまり気にしている風はなく、彼の随筆集にも平気で並べて掲載している。

おそらくこのことは、知識人の多くに共通する、思想と人格、イデオロギーと本心、合理的思想と感情生活の間に存在する深い断層のためだろうと思われる。つまり無原則のためであろう。

そもそもかつての明徳会の目的が、この自分の原則、自分の見識を確立することにあつたことを思うと、問題はそんなに単純でないことは確かであろう。そして戦後50年たった現在でも、事態はそれほど変わっているようには思われぬ（歴史的現実からみてこのような無原則が許されるはずはないのであるが）。

この思想と本心の断層の例は数多いが、ここには亀井勝一郎(1907-66.評論家)の場合を考えてみたい。亀井はファシズムがはげしくなる前は社会主義者であり、その後は戦争支持者となり、それがまた終戦で平和主義者になった人である。彼は自叙伝のなかで、戦争中の考え、それ以前の「転向」まえの社会主義者としての考え、について自らこのように語っている。「私は共産主義からの離脱を表明し、昭和10年、執行猶予になった。だがどう考えても大嘘をついているような、演劇をやらされているような気がしてならないのだ。……本心からの思想を述べよと(官憲から……筆者)云われても、本心からの思想などというものはないのだ。政治権力に向かったときの本心とは、牢獄だけは真っ平だという一種の快樂説だけであつた」と。亀井にしてこうである、当時の知識人の多くは、このような大

嘘について芝居をやらされているような、そんな気持ちだったのではないだろうか。

ところで高木兼寛がもし生きていたらどうだっただろうか、筆者の想像では、どうもこのようではなかったような気がするのである。戦争を支持するにしろ、反対するにしろ、とことんまで行ったのではないだろうか。とくに彼の場合には国粹主義的な気質（国とか天皇といった権威に殉ずることにある興奮を覚える気質）が感じられ、ひょっとしたら戦争支持者になった可能性もあったように思うのである。しかしまた、ひょっとすると、彼はかつて撃沈されて溺れるロシアの水兵を救った上村大将を大和魂の粹であるとして激賞したように、人命尊重、戦争反対に向かって突進していった可能性もあったように思うのである。いずれにしろ高木の場合には、どうしたわけか、何かとことんまでいってしまうような危険性を感じてしまうのも事実である。

永山の学長時代の業績については「慈恵医大 100 年史」に詳しい。ここに一つだけ挙げるとすると、それは大学国領校、附属第三病院が位置する土地、物件の買収に成功したことであろう。これによって慈恵医大はようやく戦後の危機を脱することができたのであり、将来にわたってその恩恵に浴することが可能になったのである。

反対に成功しなかった例を挙げるとすると、それは旧制大学予科に慈恵高等学校を併置したことではないだろうか（昭和 24（1949）年 1 月）。旧制大学予科は昭和 26 年 3 月をもって廃校することになっていたもので、当事者としては、ここで新制医大としての進学課程を設け、高校・進学課程・専門課程という道すじをつけたいと思ったのであろうが、しかし当時の財政ではとてもその負担に堪える状態にはなかった。紆余曲折したあげく、結局、進学課程を設けることができず、高校だけが孤立してしまったのである。高校からの一貫教育を信じて入学した生徒には気の毒なことをしたものである（昭和 24 年から 29 年までのわずか 6 年間の短命高校であった）。これは、予科の教授たちの要望もあり、永山の和を重んずる性格から、あまり後のことを考えずに高校設置にふみきったことによるのではなかろうか。進学課程は予科廃

校後9年目（昭和35年）にようやく設立された。

永山は昭和27年12月、任期満了をもって学長を退任した。

慈恵外史的な事柄かも知れないが、現在同窓会が発行している「慈大新聞」の題字は、編集発行人であった永山が揮毫したものである、ここに附記しておく。

8. あとがき

—— 晩年 ——

永山は生涯、現実的、楽天的であった。

昭和44年秋、彼は高熱、嘔吐、腹痛のため阿部内科に入院した。84歳であった。診断の結果は胆嚢穿孔による急性広汎性腹膜炎であった（おそらく生来の健啖が遠因になったのであろう）。ただちに手術すべきであろうが、高齢であるためその可否が問題になった。舞台裏では、永山の家族をふくめて種々話し合いがおこなわれた。そしてけっきょく手術することに決まった。しかし永山にどのように告げるかが問題であり、「猫に鈴」であった。

ところが痛みが抑えられると、永山はすっかりもとのご機嫌にもどっていた。内科の永野 允助教授（当時）は、そのことが返って心配になり、少しは真相を知ってもらった方がよいのではないかということで「先生、手術をいたしましょう、先生の病状はそれほど軽くはないのですよ……」と暗示的に告げるのだが、永山は少しも変わらず、病室は明るい雰囲気が続いた。



晩年の永山武美

幸い手術は成功し、彼はもとの健康体に復したのだが、その後の彼の書いたものをみると、あのとき自分がきわめて危険な状態にあったことは、医師の態度、顔いろからすっかり分かっていたというのである。自分の生死については意外にあっさりしたものであったのである。

かつて高木は、大和魂の根本がマメニ（誠実）、ヤサシク（柔和）、アッサリ（淡泊）、スナオ（素直）にあると説き、そのうちのアッサリについては「人はあまり生死に執着してはならない。桜花の散りぎわのようなのが好ましい」と教えたことがあったが、しかしこの永山のアッサリがすべてこの高木の教えからきているにはどうも思えない。むしろこれは永山武四郎、弥一郎らの薩摩準人的な死生観からきているのではなからうか。

永山は高木とちがって宗教的問題にはほとんど関心をしめさなかった。これは永山武四郎、弥一郎にも共通するところであるが、薩摩武士の特徴であつたらしい。薩摩藩ではながらく念仏宗（浄土宗）が禁止されていたが、それは「念仏は死をおそれる臆病者の宗旨であり、死んで阿弥陀仏にすがるなどというのは実に女々しい」と云うのであった。永山もこの伝統的な思想を父・武四郎からうけ継いだのではなからうか。

宗教にたいする高木と永山の違いは、次のようなエピソードにもあらわれている。大正初期、永山は高木の唱導する「禊の行」にいつも参加していた。参加しないと留学させてもらえないという噂があったからである。高木は持病の慢性腎炎を押しての実践であった。高木にとってはひたすらある宗教的境地（悟り）に到達するためであつて、持病などは二次の問題であつた。しかし彼の尿にはかなりの蛋白が出ており、とくにこの度の寒中禊は病気によい筈はなかった。永山はそれを気にして「先生の尿には蛋白がたくさん出ております、禊はお止めください」と告げたところ、いきなり「何を云うか、俺は命をかけてやっているんだ！、尿に蛋白が出たぐらいで止められるか、引っ込んでおれ！」と怒鳴られる始末であつた（そして後日談であるが、高木夫人から永山に「高木はとても喜んでおりました。永山は俺の体のことを心配してくれた、それが嬉しい」と伝えられた）。エピソードというのはただそれだけであるが、ここにも高木と永山のちがいがよくみえる。高木は宗教の本

質を求め、永山は宗教よりも現実を求めるのである。

高木の人間教育(マメニ、ヤサシク、アッサリ、スナオ)のどの面からみても永山はおおむね優等生であった。しかしこれがすべて高木の教育効果であったとは思えない。むしろそれは永山の天性であり、高木はその天性を見込んだのだと云えるのではなかろうか。あるいは高木は永山のそのような天性を涵養したのだと云えるのかもしれない。

永山は昭和50年12月19日の深夜逝去した。享年90歳であった。まことに尊厳にみちた武人(サムライ)のような最期であった。彼はあるとき「米寿のころまで、自分は年をとったと感じたことは一度もなかった」と云ったことがあったが、その言葉通り彼は最後まで若々しく、また「坊ちゃん男爵」らしい品格を失うことがなかった。そして最後までパーティーが好きで、人と話すことがこの上なく好きであった。

太陽と秋雲のみの天翔る

これは昭和42年の秋、北海道に招かれた永山武美(屯田兵隊長二世)が機内で詠んだ一句である。同行の妹(女流俳人・阿部みどり女)はこれに及第点をつけたという。